

人生は長く静かな河

パリが笑った。
*La vie est un
long fleuve
tranquille.*

製作: シャルル・ガツン/監督: エティエンヌ・シャタリエ/脚本: エティエンヌ・シャタリエ/プロデューサー: カンタン・撮影: ハスカル・ルベール
編集: シャンタル・ラトル/音楽: ジェラール・ガウグインズキ/美術: ジョフロワ・ラルシェ/衣装: エリザベート・タガエル/出演: ダニエル・ジエラン/カトリーヌ・イジェル/エレース・ヴァンサン/アントレ・グイルムス/クリスティーヌ・ビニエ/モーリス・モンズ/カトリーヌ・ジャコブ/パトリック・ブーシテ/アベス・ザマニ/ブノワ・シメル/ヴァレリー・ラランド/1988年度フランス映画 原題「La vie est un long fleuve tranquille」/カラー/91分/1×1.365サイズ/テレマ・マリオン・カルミッツ/MK2/プロデューサー: 共同製作 配給: 巴里映画
Produit par: CHARLES GASSOT/Film de: ÉTIENNE CHATILIEZ/Scénario: ÉTIENNE CHATILIEZ/FLORENCE QUENTIN/
Image: PASCAL LEBEGUE/Montage: CHANTAL DELATTRE/Musique: GÉRARD KAWCZYNSKI/Décors: GÉOFFROY LARCHER/
Costumes: ELISABETH TAVERNIER/DANIEL GELIN/CATHERINE HIEGEL/HELENE VINCENT/ANDRÉ WILMS/CHRISTINE PIGNET/
MAURICE MONS/CATHERINE JACOB/PATRICK BOUCHITEY/ABBES ZAHMANI/BENOIT MAGIMEL/VALERIE LALANDE

Lavie est
un long fleuve
tranquille.

(...certes, mais... parsemé çà et là d'embûches...)

パリが笑った。

人生は長く静かな河



解説

大人の男と女を描くフランス映画に、新しい風が吹いている。'87年から'88年にかけてフランス本国でヒットした「フランスの思い出」や「さよなら子供たち」「人生は長く静かな河」。いずれも画面の主演が子供たち、なのである。日本同様やはりアメリカ映画が圧倒的な動員力を誇っているなかで、この3作はともに動員2位とか3位とかに喰い込む「健斗」を見た。('88年度は、7月終了時点で、「人生は長く静かな河」は100万人動員の大ヒットで2位。1位は「ラストエンペラー」である。)

大人社会からの価値転換を目標しているんだ、という人もいるが、フランス映画の、あるいはフランス社会の転換をこの3本に見ることができるだろう。

さて「人生は長く静かな河」は、37才の新人監督、エティエンヌ・シャティリエの処女作である。

北フランスの小さな町でブルジョア一家と貧乏人一家の間におきた「新生児とりかえ事件」。映画は12年

後に事実が判明してからの、両家の大騒動をオモシロカシク描いていく。

普通に考えれば、深刻なテーマを、シャティリエ監督は実にオシャレにユーモラスにテンポ良く展開してみせ、観客を大いに楽しませしてくれる。CFの仕事が長く、「奇抜で少々挑発的」な作風を特徴とし、カンヌ国際コマーシャル・フィルム・フェスティヴァル等で、数々の受賞歴を持つシャティリエだが、そのオリジナルな味わいを初の長篇劇映画にも生かしフランス国中を笑わせて、大成功を収めてしまった。しかし同時にそこには、「大人」「友情」「兄弟」…そういったもろもろの日常生活の規範に対する、鋭い観察と批評の視点が光っており、「笑っているだけでは」観客も済まされない。主要な登場家庭となる上流階級のルケノワ家と貧乏人のグロゼイユ家(フランス本国では新聞の見出しに使われた位、有名な家族になってしまった!)の描き方は何から何まで対照的、両極端のパロディ風が何とも可笑しい。フランスは階層社会だから、階層が違えば、衣食住から始まって、言葉遣い、ジェスチャー、考え方…etcすべてが違う。両家の文化およびその細部を観察、発見するのも、この映画の大きな楽しみみである。

脚本はフロランス・カンタンという女性ライター、シャティリエとずっと一緒に仕事をしてきた人だという。出演は舞台出身の無名の俳優が起用され、「哀しみとおかしさ」を演じて絶品、子供たちも自然な演技でとても感じがいい。知られている俳優としては、「過去をもつ愛情」の往年の二枚目、ダニエル・ジュランが医師役で出演しているが、「なにかかもに疲れ果ててしまった」中年男役がなんとといえず傑作。

物語

'86年春、北フランスの小さな町バボームにまったく暮らしの違うふたつの家族が住んでいた。

ブルジョアで信心深いルケノワ家はルクレール将軍通りの豪荘なお屋敷で暮らしている。子供たちの父はフランス電力の重役、母は慈愛にあふれ、教育熱心な尊敬すべき婦人、町の名家である。

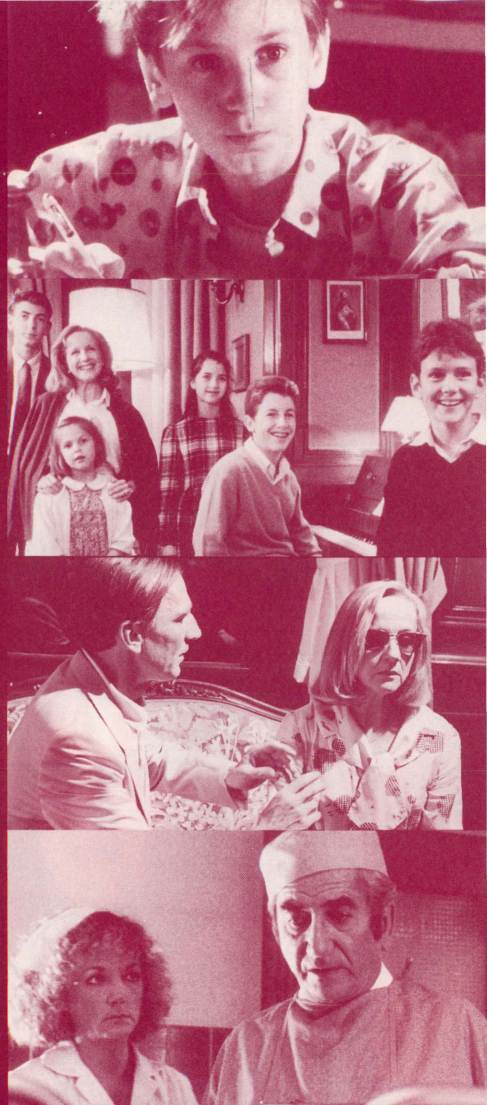
貧乏でアナーキーなグロゼイユ一家は町の反対側、物騒な地区の低家賃団地で暮らしている。ルケノワ家を支配するのは平穩と調和。子供たちの逆毛は毎朝きちんとなでつけられる。教理問答のリズムの暮らし、ピアノ、ラヴィオリ・グラタン、お風呂、宿題、タータンチェックのガウン、整理整頓、感謝のまなざし、率直さ、勤勉。子供たちは紺のワードローブに身を固め、私立学校に通う良い子たち。

一方、グロゼイユ氏は、アルジェリア戦争で負傷して以来、趣味のトランプに没頭している。子供たちの世話にはグロゼイユ夫人に押しつけたが、彼女の方は一日中、ゴシップ雑誌の「犯罪特集」をめくっている。子供たちは、幼い頃から生活の中に放り出され、リアルな人生を体験している。うまく切り抜ける方法、盗み、タバコ、ビール…。子供たちはそれぞれ、一家のリップな稼ぎ手だ。グロゼイユ一家のモットーは「できれば何でもタダで」。

この二つの家族の生活は、看護婦のジョゼットさえいなかったら、そのまま幸せに続いてははずだった。看護婦のジョゼットは、マビアル医師の愛人として15年近くも彼と妻が別れるのを待ち続け、忠実に尽くしてきた。12年前、彼女は激しい嫉妬の爆発で逆上し、全く違う人生に出発するところだったルケノワ家とグロゼイユ家の新生児をとりかえたのだ。今、彼女は秘密をばちまけようとしている。マビアル医師が本当は自分と結婚する気など毛頭ないことがはっきりしたからだ。

大騒動がもち上がるようとしている…。

(1988年度フランス映画/カラー/1時間31分)



'89年早春ロードショー 特別鑑賞券¥1200発売中
(当日¥1500均一の処)

シネマスクエア
とうきゅう
新宿新富町ミラノ座横3F (232)9274

全自由席定員制・入替制

(満席および上映中の入場はできません)

| | | | | | |
|----|-------|------|------|------|------|
| 連日 | 11:00 | 1:00 | 3:00 | 5:00 | 7:00 |
|----|-------|------|------|------|------|

■毎金・土曜の夜はレイトショーPM9:00より